

編 輯 後 記

◆ 草木は熱風に爛れ、街路は灼熱に燦ける、目の眩むやうな酷暑が襲つて來た、此の試練季に於て我等は炎熱下に奮闘する皇軍兵士を偲びて、酷暑を克服し、精心を練り、身體を鍛へ、以つて國策線に沿つて興亞の聖業に參ずるこそ我等國民の責務であらねばならぬ。

◆ さしにも、世界視聽の的になりし、外蒙國境事件即ちノセンハン附近の聖戰は、日滿軍精銳の協同作戰により世界空中戰史上、未曾有の大勝利を得、赤魔の進出を完全に防止し、全く晴れやらぬと雖も、先づ、西北部戰線は異狀なしと云ひ得べし。

◆ 『建設』も號を重ねるに従ひ内容も充實し、茲に第二十六號を會員諸氏に贈らんとす。先づ、藤井氏の『伊太利の道路建設の大偉業並にエチオピアに於ける道路建設』は風雲漲ぎる歐洲の一角に巖然と樹てる一大強國、伊太利が國防的見地から、如何に道路建設に努力されつゝあるかゞ伺はれ、米田氏の『南滿運河と産業開發』は飛躍途上の滿洲國內水運政策に關する論文にして、好資料として款待

されるものと信ずる、ついで、山崎氏の『奉天省道路維持に就て』は殆んど建國直後から同省にありて、日常直面し苦心せられし氏が道路の維持に關しての體驗を忌憚なく披歷せかれし得難き資料なり又、向井、平岡兩氏の共同發表にかかる『本溪湖大橋工事概要』は建國直後の架設工事報告なるにかかわらず其の内容は詳細に亙り、特に防寒混凝土作業は、研究充分ならざる當時の施工とて注目し値する。

茲に、御多忙中を、さきて御執筆下されし諸氏に深く感謝する次第なり。

◆ 本誌の使命も、いよいよ重大さを加へ、内容も豊富に、又發刊も順達にと編輯子汗みどろになつて努力しつゝあるが、ここ折悪しく印刷機の故障にあひ、餘期せざる程、遅延せし段、深く會員諸氏に御詫び申上げる次第なり。

◆ 尙、前號に引き續いて掲載致すべき豫定であつた高野氏の「石塊堰堤」は、都合上月號に掲載する事になりし故御了承を乞ふ。

康徳6年6月1日印刷 康徳6年6月1日發行〔非賣品〕

發行者 新京特別市惠民路第1代用官舎27號 米田正文
編輯者 新京市順天區第五代用官舎一〇四號 寺師虎之助
印刷者 新京中央通四八番地 村上慶助
印刷所 新京中央通四八番地 世界堂印刷工廠

新京特別市順天大街 交通部道路司内

發行所 滿洲土木研究會

振替口座番號新京1141番

— 發 賣 廣 告 —

滿 洲 土 木 研 究 會 編 橋 梁 設 計 圖 例 集

四 六 倍 版 1,00 餘 枚

正 價 2 圓 6 0 錢 『 送 料 共 』

本設計圖は内務省第2種荷重に準じて設計せるものにして材料表及應力表を附す内容目次を示せば下記の通り

- | | |
|--------------------------|-----------------------------------|
| 1. 鐵 筋 コ ン ク リ ー ト 床 版 | 長 1.5 米 — 6 米、有 効 巾 員 4.5 米 — 6 米 |
| 2. T 形 鐵 筋 コ ン ク リ ー ト 橋 | 橋 長 7 米 — 14 米、有 効 巾 員 4.5 米 |
| 3. 同 | 橋 長 7 米 — 14 米、有 効 金 員 6 米 |
| 4. I 形 鋼 桁 橋 | 橋 長 7 米 — 12 米、有 効 巾 員 4.5 米 |
| 5. 同 | 橋 長 7 米 — 12 米. |
| 6. 各 種 橋 台 橋 脚 | |
| 7. 鐵 筋 コ ン ク リ ー ト 杭 | 長 3.6 米 — 14 米 |

發 行 所 交 通 部 内
滿 洲 土 木 研 究 會 編 輯 部

橋 梁 設 計 圖 例 集 申 込 書

所 屬

氏 名

申 込 内 譯

品 名	部 數	送 金 方 法	送 附 場 所
橋 梁 設 計 圖 例 集	部		

上 記 之 通 リ 發 送 被 下 度 候 也